

# 長母音の短縮から核が生ずるか\*

服部仮説を巡って

上野善道

## On Hattori's Hypothesis Does Shortening of Long Vowels Produce an Accent Kernel?

UWANO, Zendo

The paper "On Proto-Japanese" by Shirô Hattori is the culmination of his works on the comparative study of Japanese and Ryukyuan. The basis of its accentual study is formed by the hypothesis that shortening of long vowels produces an accent kernel. In this paper, by minutely examining Hattori's hypothesis, it is argued that in the examples from the Ainu languages and the Ryukyuan languages the accent kernels (an ascending kernel and a falling kernel, respectively) were already produced at the stage of long vowels. The conclusion is that vowel shortening is not a sufficient condition, and further specifications are necessary to apply the idea widely.

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1. ねらい              | 3.3 第1根拠に関する私見       |
| 2. アイヌ語             | 3.4 服部仮説の第2根拠        |
| 2.1 服部のアイヌ語祖体系      | 3.5 第2根拠に関する私見       |
| 2.2 アイヌ語祖体系に関する私見   | 3.6 琉球方言の古い音調型       |
| 2.3 アイヌ語アクセントの疑問点   | 3.7 琉球方言の古い音調型に関する私見 |
| 2.4 言い切り形／接続形の区別の有無 | 4. 日本祖語の音調型          |
| 2.5 昇り核の由来          | 4.1 服部の想定する音調型       |
| 2.6 右方向への音調移動       | 4.2 日本祖語の音調型に関する私見   |
| 2.7 リズム現象           | 4.3 服部による金田一批判       |
| 3. 琉球方言             | 4.4 服部・金田一両説に関する私見   |
| 3.1 短縮で下げ核が生じたとする仮説 | 5. まとめ               |
| 3.2 服部仮説の第1根拠       |                      |

**Keywords:** Hattori's hypothesis, vowel shortening, accent kernel, Ainu languages, Ryukyuan languages

**キーワード:** 服部仮説, 長母音の短縮, アクセント核, アイヌ語, 琉球方言

\* 本稿は、2016年7月3日にアジア・アフリカ言語文化研究所で開かれた Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology で行なった同名の口頭発表を文字化したものである。招いて下さった伊藤智ゆきさんに感謝する。また、二人の査読者のコメントを受けて、いくつか説明を補うことができた(注3と注6はその一部)。引用のミスも訂正できた。御礼を申し上げる。本研究は2016年度 JSPS 科学研究費 16K02619 による研究成果の一部である。

## 1. ねらい

本論で「服部仮説」と呼ぶのは、服部四郎 1979a: 99 にある「長母音がつづまって短母音となったために、そこに「アクセントの頂点」(アクセント核)が生じた」とする説である。これと同じ内容は服部の一連の論文の中で若干の表現差を伴いつつ類出し、そのアクセント史の基調をなす考えとなっている。その論拠として取り上げられているのはアイヌ語と琉球方言の例で、それぞれ生ずる核は「昇り核」(服部は「上昇核」とも)と「下げ核」(同じく「下降核」)である。以下、用語と記号を私のものに統一しながら、その中身を批判的に検討する。

## 2. アイヌ語

### 2.1 服部のアイヌ語祖体系

服部四郎 1979a, b の元になっているのは、アイヌ語に関しては服部 1967 で、そこで比較研究の対象になっているのは、アイヌ語カラフト方言(具体的には、西海岸北部のライチシカ方言)とアイヌ語北海道方言(同じく日高の沙流方言)である。両方言はそれぞれ(1)と(2)の特徴を持つ。

#### (1) カラフト方言の音韻特徴

音節構造: CV, CVV (同一母音連続=長母音), CVS (-S=-w, -y の半母音), CVC (-C=-m, -n, -s, -h) の4種。CVは1モーラ, 他は2モーラで, 自立語は2モーラ以上からなる。

音調: 第1音節が1モーラの軽音節(CV-)だと低始まり, 2モーラの重音節(CVV-, CVS-, CVC-)だと高始まりで, 第2音節以降はリズム現象でそれぞれ「低高低高…」, 「高低高低…」となる(厳密には, 2番目以降の「高」は少し低めになる)。最初の音節構造からこの2パターンのどちらであるかが予測できる「一型アクセント」である<sup>1)</sup>。

#### (2) 沙流方言の音韻特徴

音節構造: CV, CVS (-w, -y), CVC (-m, -n, -s, -p, -t, -k, -r) の3種で, CVVはない。

音調: 「昇り核」/ / が第1音節にあるか第2音節にあるかで対立する。詳しく述べると, CVC/S-, すなわち重音節(-Sも-Cに含めると閉音節)始まりの単語はすべて第1音節に核があるが, CV-の軽音節(開音節)始まりの単語は通常第2音節に核があるものの, 一部は第1音節に核があって対立する。

1) 村崎恭子 1979: 5 は、服部の調査・分析に基づくと断わった上で、次のようにモーラ単位で「アクセントの法則」を規定する。「(1) 主アクセントは第2モーラにあり、副アクセントは第4, 第6, 第8モーラにあってこの順にアクセントが弱くなる。(2) ただし、アクセントのあるべきモーラがVまたはC<sub>2</sub>であれば、その一つ前のモーラにアクセントが移動する。」その後、次に次を付け加えている。「この法則はあくまでも理論上の法則であって実際には必ずしもこの通りではない。もともと弁別的ではないから外的条件によって変り易いのは理解できる。主アクセントはその前後のモーラよりも相対的に高く発音される現象である。副アクセントは非常に弱く文脈の中ではイントネーションによって消されたり、聞こえなくなったりすることがある。」実例には、「文末であったり、強調が置かれたりしてアクセントの位置が変化した例」も出ている。

以上を踏まえつつ比較研究をした服部 1967 は、(3) のアイヌ祖語の再構（文字通りでは「アイヌ祖語の音韻構造の部分的再構」p. 208）をし、その祖形からカラフト方言と沙流方言への変化を描いた。「を [ (上昇), l を ] (下降) に、そして / / を / / に置き換えて引用する。以下、特に断わらない限り、「北海道方言」は沙流方言をさす。

### (3) 服部のアイヌ語アクセント史

カラフト方言 (一型)	アイヌ祖語 (一型)	北海道方言 (核表示 / /)
CV[CV	← *CV[CV →	/CV[CV/
CV[CV]CV	← *CV[CV]CV →	/CV[CVCV/
CV[CVV]CV	← *CV[CVV]CV →	/CV[CVCV/
CV[CVC	← *CV[CVC →	/CV[CVC/
CV[CVS	← *CV[CVS →	/CV[CVS/
[CVC]CV(CV)	← *[CVC]CV(CV) →	/[CVCCV(CV)/
[CVS]CV(CV)	← *[CVS]CV(CV) →	/[CVSCV(CV)/
[CVV]CV ← *CV[V]CV	← *CV[V]CV → *CV[V]CV	→ /[CVCV/
[CVV]CVC ← *CV[V]CVC	← *CV[V]CVC → *CV[V]CVC	→ /[CVCVC/
[CVV]CV ← *CV[V]CV	← *CV[V]CVV → *CVV[CV]V	→ /CV[CV/
[CVV]CVS ← *CV[V]CVS	← *CV[V]CVS → *CVV[CV]S	→ /CV[CVS/

## 2.2 アイヌ語祖体系に関する私見

上記 (3) の祖語段階の \*[CVC]CV, \*CV[V]CV, \*CV[V]CVV 等までは、第 1 音節内で上昇位置が相補分布をなしており、対立なしとすることができる。しかしながら、次の段階の \*[CVC]CV, \*CV[V]CV ; \*CVV[CV]V 等になると、相補分布ではあっても、その音調実質から考えて、第 2 音節に上昇がある型は、第 1 音節に上昇のある型と対立すると私は解釈する。確かに、後続音節が長いと下降の遅れが生ずる余裕はあり、上昇位置が第 1 音節内にある \*CV[V]CVV までであれば同じ型と解釈できるが、(3) では上昇が第 2 音節に移っていることから対立と見る。とすれば、服部説とは異なり、(3) の「アイヌ祖語」と「北海道方言」の間に示されている北海道祖体系の段階で、長母音を保ったまま昇り核の位置による対立が先に生じ、その後長母音が短縮したことになる。

私の考える核の位置を語頭から音節単位で数えて丸付き数字で示すと、この変化は (4) のようになる。それぞれの短縮の後ではじめて対立するようになったものではなく、その前の段階において対立が生じていたと考えられるのである。すなわち、「CVV → CV の変化によってアクセント核が生じた」とする服部仮説は成り立たないと私は考える。

- (4) \*CV[V]CV (①型) → /[CVCV/ (①型)  
 \*CVV[CV]V (②型) → /CV[CV/ (②型)

もう一つ、服部・知里 1960 では \*CVV[CV]CV としていた祖形を服部 1967 の (3) では \*CV[V]CV と訂正している。このことから考えて、具体的な記述は見当たらないものの、\*CVV[CV]CV も \*CV[V]CVCV に直したはずである。これらの変更は、\*CV[V]CVV, \*CV[V]CVS の型に合わせたものであろうが、私は、元のまま \*CVV[CV]CV, \*CVV[CV]CVCV でも問題はないと考える。

\*[CVV-でも、(5)のように、上昇はともに第1音節内にありながら、下線を引いた第2音節の長さに応じた相補分布をなすからである。

(5) \*[CVV]CV, \*[CVV]CVCV 対 \*CV[V]CVV, \*CV[V]CVS

さらに言えば、むしろ、祖語では CVV (を含む重音節) はすべて高始まりだったとする方が、より体系的になり、それからの変化も自然なものとなる。この祖形から出発すると、カラフト方言の音調型へは不変化となる。言い換えれば、(以下、「高」や「低」の静的捉え方を私の動的な捉え方に翻訳して述べると)「上昇の左移動」という有標な変化 (Uwano 2012) を想定しなくて済む。また、北海道方言への変化も、(a) 第2音節が \*CV(C) の (母音性において) 短い場合は、第1音節の \*[CVV- がここでも「核の左移動」なしにそのまま短縮して [CV- になり、一方、(b) 第2音節が長い \*CVV, \*CVS の環境では、「上昇と下降の遅れ」と「上昇の遅れ」という右移動が2段階に生じてから第1音節の \*CVV が短縮したと見る。(b) の過程を (6) に示す<sup>2)</sup>。

- (6) \*[CVV]CVV → \*CV[VCV]V (①) → \*CVV[CV]V (②) → /CV[CV/ (②)  
 \*[CVV]CVS → \*CV[VCV]S (①) → \*CVV[CV]S (②) → /CV[CVS/ (②)  
 Cf. \*[CVC]CV (①)

服部説と私説を対比して示すと (7) のようになる。上7行は両者同じで、それぞれ下4行が異なり、H が服部説、U が私説である。服部説では \*CV[V- の重音節の内部で上昇するという有標な型が祖体系の中で安定的に存在したことになるが、私はアイヌ祖語では重音節始まりの単語はすべて高く始まったと考え、服部の想定した CV[V- はあくまでも変化の過渡期において生じた型と考える。\*[CVV]CVV → \*CVV[CV]V 等は、どこまで変化の過程を表示するかという問題でもあるが、現実の変化をより細かく見ると段階的に変化したはずで、\*CV[V- はその途中の段階に現われたものという位置づけである。

2) 今一つの過程として下記も可能である。口頭発表の際は、服部が途中に立てている \*CV[V]CVV, \*CV[V]CVS を組み込むことを重視してこの脚注案で話した。この案も可能ではあるが、第2音節が長い重音節の環境では第1音節内の高まりがより後ろにずれる余裕があるので、第1音節内部の後半だけが局所的に高まる音調よりも、CV[VCV]V, CV[VCV]S を経たとする案の方が音声学的により自然と見た。

\*[CVV]CVV → \*CV[V]CVV → \*CVV[CV]V → /CV[CV/  
 \*[CVV]CVS → \*CV[V]CVS → \*CVV[CV]S → /CV[CVS/

## (7) 服部説と私説の対比

カラフト方言 (一型)	アイヌ祖語 (一型)	北海道方言 (核表示 / /)
CV[CV	← *CV[CV →	/CV[CV/
CV[CV]CV	← *CV[CV]CV →	/CV[CVCV/
CV[CVV]CV	← *CV[CVV]CV →	/CV[CVCV/
CV[CVC	← *CV[CVC →	/CV[CVC/
CV[CVS	← *CV[CVS →	/CV[CVS/
[CVC]CV(CV)	← *[CVC]CV(CV) →	/[CVCV(CV)/
[CVS]CV(CV)	← *[CVS]CV(CV) →	/[CVSCV(CV)/
H [CVV]CV ← *CV[V]CV	← *CV[V]CV → *CV[V]CV →	/[CVCV/
[CVV]CVC ← *CV[V]CVC	← *CV[V]CVC → *CV[V]CVC →	/[CVCVC/
[CVV]CV ← *CV[V]CV	← *CV[V]CVV → *CVV[CV]V →	/CV[CV/
[CVV]CVS ← *CV[V]CVS	← *CV[V]CVS → *CVV[CV]S →	/CV[CVS/
-----		
U [CVV]CV	← *[CVV]CV →	/[CVCV/
[CVV]CVC	← *[CVV]CVC →	/[CVCVC/
[CVV]CV	← *[CVV]CVV → *CV[V]CVV → *CVV[CV]V →	/CV[CV/
[CVV]CVS	← *[CVV]CVS → *CV[V]CVS → *CVV[CV]S →	/CV[CVS/

## 2.3 アイヌ語アクセントの疑問点

以上で、アイヌ語に関する本稿の中心テーマは終わるが、なおいくつか疑問が残る。

その一つは、カラフト方言の「CVVCVV」の存否である。カラフト方言に CVVCV とは別に 2 音節語の CVVCVV もあるとの記載が服部 1967: 211, 213 にあるも、実例はなく、対応する北海道方言のアクセントも不明である (服部 1964 にも例が見当たらない)。(3) を見ても、祖形の \*CV[V]CVV に対して、カラフト方言では [CVV]CV が対応している。(ただし、CVVCVV, CVVCVV のカラフト方言例は服部 1967: 214 にある。祖形は不明。)

CVVCVV の存否は重要である。祖体系の立て直しに繋がる問題だからである。今、仮にそれが存在し (その場合の音調は [CVV]CVV 以外に考えられない)、北海道方言が /[CVCV]/ で対応するとしたら、最もあり得ると考えられる祖形 (及びそれからの変化) として

## (8) [CVV]CVV ← \*CVV]CVV → /[CVCV/

を立て、かつ、カラフト方言においてこの [CVV]CVV に対立する [CVV]CV を派生させるためには、服部説の (7)、すなわち

## (9) [CVV]CV ← \*CV[V]CV ← \*CV[V]CVV → \*CVV[CV]V → /CV[CV/

を今一度復活させて (8) とは別の祖形を立てることになる<sup>3)</sup>。そうなると、アイヌ祖語の段階で

3) たとえば、(9) で \*CVV]CVV を保持するために (8) に \*CV[V]CVV を想定したのでは、あまりに祖体系の中で異質になりすぎる。また、(9) に \*CVV]CV を立てると、北海道方言の ↗

## (10) \*[CVV]CVV 対 \*CV[V]CVV

のアクセント対立があった可能性が生ずる。また、もしもカラフト方言の [CVV]CVV に対応する北海道方言が /CV[CV]/ であるとしても、順序を (8) (9) に合わせて示すと、

(11) [CVV]CVV ← \*[CVV]CVV ← \*[CVV]CVV → \*CV[VCV]V → \*CVV[CV]V → /CV[CV]/  
[CVV]CV ← \*CV[V]CV ← \*CV[V]CV → \*CVV[CV]V → \*CVV[CV]V → /CV[CV]/

のように、同じく祖語での対立となってしまう<sup>4)</sup>。

今一つは、カラフト方言の CVC の音調型が [CVC であるか [CV]C であるかに関する疑問で、服部の記述には両方が見られる点である。服部 1959: 282 では、[CVV, [CVV]CV に対して [CV]C, [CV]CCV のように「ほぼ一定している」とある。服部・知里 1960: 35 でも、カラフト方言の CVC を次のように記し、そのまま祖語にも立てている。

## (12) mu[ni]n 《腐る》; [sa]npe 《心臓》, [hu]sko 《古い》

すなわち、CV[CV]C, [CV]CCV で CVC の内部で下降しており、[huu]re 《赤い》の [CVV(-), [ʼay]nu 《人》の [CVS(-) に対し、無声摩擦子音 s を含む [CV]C の方が下がりやすいという音声学的な理由があるのか疑問になる。

ところが、(3) の服部 1967 のカラフト方言では、[CVV, [CVC, [CVS, CV[CVC, CV[CVS, [CVC]CV, [CVS]CV のように、重音節はその構造を問わず高平調となっている。服部 1976: v も (13) のようにカラフト方言の重音節は高平調である。変更した旨の記述も見当たらず、理由は不明である。

(13) カラフト方言	←	アイヌ祖語	→	北海道方言 (/ /)
ʼe[too]ro		*ʼe[to]oro 《いびきをかく》		/ʼe[toro/
ci[kah		*ci[kap 《鳥》		/ci[kap/
[ʼes]na		*[ʼes]na 《くしゃみする》		/[ʼesna/
[ʼay]nu		*[ʼay]nu 《人》		/[ʼaynu/
[huu]re		*hu[u]re 《赤い》		/[hure/

↗ /CV[CV]/ が説明しにくくなる。なお、一部は服部説を引き継いだこの仮説に立った場合、\*[CVV]CVV の第 2 音節の長母音のカラフト方言でそのまま保たれたのに対して \*CV[V]CVV の第 2 音節が短くなったのは、後者の重音節内の高まりが顕著に目立ったためにその後の第 2 音節は対比的に曖昧化し、短母音に合流したことが考えられる。

4) 口頭発表後、この CVVCVV の例として、村崎恭子 1979: 6 に 1 例だけであるが yáanii 《浜にあがった木》が見つかった。対応しそうな北海道方言をいくつかのアイヌ語辞典に当たってみたが、見つけられなかった。その後、村崎氏に伺ったところ、yáanii は 2 語と考えるのがいいのではないかとお考えであった。併せて、CVCV のよく使われる単語で第 1 モーラが高い例として sine 《一つの、一人の》, tani 《今》, siri 《天気、様子》, nani 《すぐ》, CVCVCV で第 1 モーラが高い例として pirika 《きれいだ、良い》, nakene 《どこへ》があるというご教示もいただいた。そうすると、「カラフト方言一型アクセント説」も再検討を迫られることになる。関連して、Vovin 1993, 板橋義三 2001 は、アイヌ祖語にアクセントの対立があったとする説を出している。ともに詳しく検討すべき課題ではあるが、本稿は「服部仮説」の検証がテーマなので、これ以上は立ち入らないことにする。

さらに (13) で気になるのは、今度は祖語の (-)CVV- に関してであるが、\*<sup>h</sup>e[to]oro とあり、(3) の \*CV[CVV]CV とは異なっている。そうすると、第 1 音節と第 2 音節の違いはあるにせよ \*hu[u- と \*-[to]o- の例と相俟って、ここでも服部のアイヌ祖語はアクセント対立の可能性も考える必要が出てくる。

#### 2.4 言い切り形／接続形の区別の有無

これは今後のアイヌ語調査研究への要望となるが、類型論の観点からも、音調型の詳細について知りたい点がある。具体的には、昇り核を有するアイヌ語北海道方言には、日本語諸方言において私が提唱している「言い切り／接続の区別」(上野 1977: 297, 301) がないのかという点である。これに関する報告は、管見の及ぶ限り、見当たらない。

日本語、とりわけ東北方言の場合のこの区別は、言い切るつもりで発音するか、後に続けるつもりで発音するか「態勢」の問題である(時に誤解する人がいるが、実際に後に続かない／続くとは別である)。そのために、外部観察が困難である。(14) に示すように、単独形にも、助詞付き形にも、両方がありうる。単語単独の発音でも、そこで言い切るつもりで発音した場合(「。」で示す)と、続けるつもりでいてやめてしまった場合(「…」で示す)では音調が異なる。しかし、これはユレでは決してない。機能に応じた明瞭な使い分けをしているのである。相手が[カプト…と言ったとすると、次に言葉が続かなくてもその人はまだ話したいのだと分かるので、聞き手は口を差し挟まずに待つのが普通である。

- (14) 岩手県雫石方言：[カ]プト。(切) [カプト…(接)；  
[カ]プトモ。(切) [カプトモ…(接)

アイヌ語の先行報告では、次のように記述されている(下線は引用者)。

- (15) 「目高の沙流方言では、そのアクセント核は、日本語のとは異なり、前に「低」を伴うか、先行の音節を低にしようとする「高」であって、「昇り核」と言うべく、続く音節は、環境によって、「低」になったり「高」になったりする。この核を /f/ で表わすならば、/tuʃukur/ 《巫術者》は [tuʃulkur] となったり、[tuʃukur] となったりする。(厳密な表現を用いれば「[tuʃulkur] と [tuʃukur] とは補い合う分布をなし、ともに /tuʃukur/ に該当する、と解釈する。)(強さは第 1 音節が一番強い傾向が著しい。)(服部 1961: 8-9。この音調関係の記号は原文のまま)

- (16) 「このアイヌ方言の「アクセント核」はその直前の音節が低くそこから高くなる「昇り核」で、それにつづく音節は低くても高くてもよい。」(服部 1973: 23)

服部 1961 から服部 1973 にかけて、「昇り核」の規定が逆行的なものから順行的なものに大きく変更されているが、核の後の音調に関しての変更は見られないと読める。ただし、(15) の「環境によって」の「環境」の内容、および「厳密な表現」における「補い合う分布」が何を条件として成り立つとしているかは不明である。

それに対して、同じ沙流方言を扱った田村すず子 1988: 13 は

(17)「低から高への上昇が弁別的である。この上昇点より前の音節はすべて低く、後ろの音節は、一定の規則性をもって次第に下降する。」

とする。服部との間で記述が一致しない点もあり、詳細は不明である。

田村の「一定の規則性」の内容も今一つはっきりしないが、「次第に下降する」とすれば、「言い切り／接続」の別なしの可能性が高くなる。もしもそうだとすれば、次節に述べるように、同じ「昇り核」であっても、日本語東北方言等<sup>5)</sup>とはその由来が異なっていることによる可能性が考えられる。

いずれにせよ、(アイヌ語の場合は調査が困難になっているかもしれないが、)核の後に少なくとも2~3音節ある単語を言い切り／接続の環境に置いたときの音調、それらに語頭に核のある単語が続くとき、さらには語末核の単語に語頭核の単語が続くときの具体音調の報告が欲しいところである。

## 2.5 昇り核の由来

前節を少し補足すると、東北方言の「昇り核」は、「下げ核」から変化してできたものと私は考えている(上野 1989: 203 注 5, 1992: 8, Uwano 2012: 1430-1432 等)。これを3拍語の例で図式的に表わすと、(18) のようになる。

(18) ○[○]○ → ○[○]○。○[○○…  
/○○]○/ → /○[○○]/

1拍卓立型から核の位置(◎)は同じまま、その性質が変化したものである。上昇位置は固定したまま、下降位置が接続形において遅れ、方言によっては(環境により)下降が消失したものである。よく誤解されるが、下降(あるいは“下がり目”)がその位置のまま上昇(“上がり目”)に転じたものではないことに注意されたい(上野 1986: 19)。

それに対して、アイヌ語北海道方言の昇り核が服部説のような形で生じたとすれば、下げ核を経ていない点で、東北方言とは由来が異なり、それが言い切り／接続の別がない(かと思われる)ことに繋がっている可能性がある。すなわち、東北方言の場合、接続環境においてかつての下げ核の反映として下降が明瞭なまま末位まで移動したために機能分化が起こったのに対して、アイヌ語では昇り核のある音節末(ないし音節中?)に元々あった下降は核ではなかったために、(減衰を伴いつつ?)語末方向に移動(さらには消失?)はしていても、まだ変異形の段階で、明瞭な分化には至っていない可能性も考えてみる必要がある。

## 2.6 右方向への音調移動

音調移動は右方向(progressive)に起こるのか、左方向(regressive)に起こるのか、あるいは両方向が可能で、言語や時代によってさまざまなのか、なお詰めるべき課題が残されている

5) 参考までに記すと、日本語北海道方言のアクセント調査は特にしていないが、北海道方言研究会で口頭発表をした道央出身者の音調は正に昇り核のものであった。トーカイ[ドーチュー|ヒザ[クリケ°ノ…(東海道中膝栗毛の…)]などが頻出した。アクセント単位は「|」の所で切れ、/トーカイ[ドーチュー/の核の位置からその単位の末尾までが高くなっており、岩手県出身の私の音調と同じである(私自身は…ヒザク[リケ°ノの方がより自然ではあるが)。その他も私の音調とよく似ていた。他に、テレビのインタビューでも同趣の発音を耳にすることがある。

る（右方向が無標という私の基本的な立場は Uwano 2012: 1432-1437 に述べた）。

服部説では、アイヌ祖語から北海道方言への変化は、一定の環境下で「上昇と下降の遅れ」が起り、かつ下降がさらに（語末の方まで？）ずれたという右方向への変化である。そして、私説でも（細部の過程は別として）右方向への変化は同じである。

一方、アイヌ祖語からカラフト方言への変化は、服部説では [CVV- ← \*CV[V- と上昇が「左」へ移動しているが、私見ではこの変化は一般的ではなく、CVV という 1 音節内での現象であり、かつ一型アクセントゆえに生じたものと見る<sup>6)</sup>。

拙案の \*[CVV- からなら、カラフト方言へは無変化で、左への移動例は消える。また、北海道の八雲・長万部方言の③型<sup>7)</sup>は、②型から右方向へ変化したものと位置付けられ（①は不変）、移動はすべて右方向に順行的に起こっていることになる。

## 2.7 リズム現象

最後の課題は、カラフト方言のリズム現象はどの段階で生じたのかという点である。なお、(3) の [CVC]CV(CV) ← \*[CVC]CV(CV) の下線部の音調は、カラフト方言は [CVC]CV(CV) ないし [CVC]CV(%CV) (% は半上昇) の省略表記 (p. 213)、祖形では不問にしたものとみなして話を進める。

これについて服部は何も触れていないが、(a) アイヌ祖語にあった、(b) カラフト方言で生じた、という 2 つの可能性がある。

このうちの (a) は、祖語にアクセント対立無しが大前提となる。その前提は満たしているが、服部説の \*CV[V- (と \*[CVC-, \*[CVS) からではリズム現象が起こることは容易には考えにくい。拙案の \*[CVV- (と \*[CVC-, \*[CVS) なら \*[CVV]CV[CV 等の史的派生が容易になる。その場合、北海道方言では昇り核となった段階で、他の上昇（とそれに続く下降）は消失したと考えることになる。

もしも (b) であるなら、(服部説なら \*CV[V-, 拙案なら \*[CVV- から) カラフト方言で [CVV- が成立した後に、語頭から順に及んだものとする。この場合も拙案の方が変化の過程が少なく済む。

- 
- 6) 東京方言では、サ[カナに対して同じ句頭でも自然な発話では[コーリ, [アイダ, [サンマで語頭重音節（促音節を除く）は高く始まるが、これは一旦 \*コ[ーリ, \*ア[イダ, \*サ[ンマになった後で上昇が左に移動したのではなく、ここに述べたことへの反例にはならない。これは、\*[○○○ → \*○[○○ という上昇の右移動が起きたときに、語頭重音節の単語はその変化を免れて元のまま残った結果に過ぎない。（なお、促音節の場合は最も独立性の弱い促音が直前の主音と一体に扱われ、\*[キップ → \*キ[プと変化した。\*[○○ → \*○[○に準じた変化である。）
- 7) 「アイヌ語の北海道方言のうちの多くは、2 系列アクセント素体系を有する。すなわち、【中略】核が第 1 音節にあるか、第 2 音節（があればそこ）にあるか——八雲方言・長万部方言のように、第 3 音節があれば、第 2 音節の代りに第 3 音節に核のあるものもある——という弁別の特徴を有する。ただし、核の無いアクセント素を有しない点で、日本語のアクセントとは著しく異なる」（服部 1961: 8）。要するに「①なしで、①と②か、①と③の二型アクセント」であるとまとめられる。ただし、北海道の美幌・様似【と釧路？】方言はアクセント対立がない（「1 系列アクセント素体系を有する」という（同 p. 9）。

### 3. 琉球方言

#### 3.1 短縮で下げ核が生じたとする仮説

服部四郎 1959: 278 は、奄美群島諸方言の報告の中で、琉球方言の2音節名詞に「A群」(鼻<sub>1</sub>, 風<sub>1</sub>, 橋<sub>2</sub>, 石<sub>2</sub>, ...), 「B群」(花<sub>3</sub>, 島<sub>3</sub>, 汗<sub>4</sub>, 雨<sub>5</sub>, ...), 「C群」(甕<sub>3</sub>, 蚤<sub>3</sub>, 舟<sub>4</sub>, 桶<sub>5</sub>, ...)を初めて提唱した<sup>8)</sup>(下付き数字は金田一語類)。金田一語類の第4類と第5類が、そして部分的に第3類もB群とC群とに分かれている点が特徴で、これが現在では広く認められるところとなっている。その上に立って、服部は次の説を述べる(以下、断わりのない限り【】は私の補足。「/」は対立、それがないのは統合を意味する)。

- (19)「第一種【A/B/C】の中には、【中略】C群の名詞の第1音節母音の長いものがある。この母音が短い方言は、第一種系・第三種系【AB/C】では例外なく第1音節が高い(そこに【下げ】核がある)。これは恐らく、第1音節母音の長いのが古い形で、これが短かくなったために、第1音節が高くなりここに核ができたのであろう。」(p. 280)

そして、この仮説に3つの根拠を提示している。1つはアイヌ語であるが、すでに見たので、残る2つの根拠とされている琉球方言の例を以下で検討する。これらの論拠は服部 1979aでも再述されているが、より詳しい服部 1959に基づいて述べる。服部の根拠ごとに取り上げ、それに対する私見を述べる形で進める。なお、服部が対象としているのは沖縄本島以北の北琉球方言で、南琉球方言はごく一部に簡単に触れているに過ぎない。

#### 3.2 服部仮説の第1根拠

服部 1959: 280-281の第1の論拠を、長くなるが(20)に引用する(kは有気音, Iは中舌母音。他にも論旨に関わらない微変更あり)。

- (20)「徳之島の大部分の方言では、C群名詞の第1音節母音は短かく且つ高いが、花徳、馬根のように、この母音を僅か長めに発音するものもある(第2音節はもちろん低い。花徳は第1音節がやや上昇気味である)。一方、このC群名詞の第1音節母音を長く発音する諸方言のアクセントは次のようである。〔甕〕に当る単語を例にとる。)

ka[:]mI	ka[:]mInu	与那間【以下、与名間に修正】
ka[:]mI	ka:[mI]ga	金見
ka:[mI]	ka:[mI]nu	浅間
ka:[mI]	ka:mI[nu, ka:[mInu]	松原西区(話し手による)

与名間式の発音の第1音節母音が短かくなれば花徳式発音となり、この母音が更に短かくなれば、第一種系の他の諸方言式発音([ka]mI)となる。」

これに対して、金田一春彦 1975: 138-142は、その逆を考え、

8) 1音節名詞には、「a群」(毛, 葉, 血, …), 「b群」(木, 齒, 乳, …)の2群を立てている。そして、2音節名詞がA/B/Cの第一種系とA/BCの第二種系はa/bを区別し、AB/Cの第三種系とABCの第四種系はabで区別がないとしている。ただし、1音節名詞の歴史は取り上げられていない。本稿でも後出(23)で触れるに留めるが、そこではA, Bとしてまとめて示す。

(21) [ka]mI → ka[:]mI

とアクセントのある短母音が長母音化したものと見ている。

### 3.3 第1根拠に関する私見

音調変化自体としては、服部説も金田一説もどちらも可能である。しかしながら、2音節名詞3・4・5類が音条件が見つからないのに二分される事実は金田一説では説明不能である。この点において、服部説の方がより真実に近いと考える。

ただし、それは3・4・5類が二分されるという点においてであって、そこから直ちに祖形に長母音を想定することにつながるとは限らない。可能性としては、長母音を立てない案も検討する必要がある。

祖語に長母音を立てない場合、本土方言と琉球方言との対応から、少なくとも「1, 2, 3a, 3b, 4a, 4b, 5a, 5b」の8つのアクセント類が必要となる(4・5類は別類とする)。今、話を「3a, 3b; 4a, 4b; 5a, 5b」だけに絞ると、それぞれ、たとえば

(22) 「\*低低, \*昇低; \*低高, \*昇高; \*低降, \*昇降」

のように「低, 高, 昇, 降」の4種類の調素 (tonemes) が必要となる。加えて、1・2類が下降式音調を持っていたとする私の見解に従えば、それぞれ「\*高中」「\*高低」で、さらにもう一つ「中」調素も必要になる。

これが体系としてあり得るか否かは、2音節語だけでは判断不能である。多音節語における「昇」「降」の分布がどうなっているかがその鍵を握ることになるが、現段階では「昇」「降」が「低」「高」とほぼ拮抗する分布をしていたとみなすのは困難である。

その点で、4種(以上)の調素を立てる仮説より、短母音に対立する長母音を祖語に立てる服部仮説の方が、今のところ無理のない案だと考えられる。しかしながら、単に「長母音の短縮」では「核」が生ずる条件として不十分である。たとえば、「低平調長母音」が短縮しても「低平調短母音」になるだけで、昇り核も下げ核も生じえない。核が生ずるためには、単語レベルでCV[V], [CV]V, [CVV]など、長母音音節内に高い部分がすでに存在すること、詳しく言えば、「昇り核」のためには「上昇」が、「下げ核」のためには「下降」がすでに存在していることが必須となる。

服部仮説の第1例(20)では、[ka]mIのような「短母音音節の下げ核」は確かに「短母音化」によって生じたものとはなる。しかし、与名間方言のka[:]mI(甕), ka[:]mInu(甕が)の「第1音節の下げ核」は、この長母音段階からすでに存在していることに注目しなければならない。ここにおいても、核の種類の違いはあれ、アイヌ語と同様、短縮によってはじめて核が生じたのではなく、長母音の段階で核はすでに存在し、母音の短縮で短母音音節にも核が現われてその存在が一層明瞭になったものと考えられる。

このように、服部仮説はその位置づけに修正が必要であるが、それ以外にも、長母音祖形説自体の可否も別途検討する必要がある。そしてこの場合も、声調説と同様、2音節語だけでは不十分で、多音節語における長母音の分布状況の精査が不可欠である。

諸方言における多音節語の状況が不明な現段階でこれについて答えを出すのは困難であるが、後出の3.6, 3.7節や4.1, 4.2節にも関わる事柄なので、ここで述べておく。まず、服部

1979a, b を整理すると、位置を問わず長母音が A~C 群のどれにも出ない方言（奄美大島名瀬方言等）、C にのみ出る方言（沖縄首里方言）、A と B に出る方言（沖縄与那嶺方言）、B と C に出る方言（沖縄恩納方言等）、ABC のすべてに出る方言（徳之島浅間方言）がある。このうち、3 群ともに長母音が現われる浅間方言（私の調査。服部はそれからの引用）における次の事実に注目しておきたい。今、服部の A~C 群を 3 音節語まで拡張した場合、その実現は (23) のようになっている（語例は多く、代表例のみを示す。nu は主格助詞。大文字は喉頭化音。’ は声門閉鎖音<sup>9)</sup>）。

(23) 1 音節語 2 音節語 3 音節語

- A: [CI: (血), [CI:]nu [hana: (鼻), [hana:]nu [’iwa:]sI (鯛), [’iwa:]sInu  
 B: ha[: (齒), ha:[nu hana[: (花), hana:[nu hasjami[: (鋏), hasjami:[nu  
 C: na:[bI (鍋), na:[bI]nu kata:[na (刀), kata:[na]nu

ここまでの範囲で長母音の出現をまとめると、A は第 2 音節、B は（第 2 音節ではなくて）語末音節、そして問題の C は（第 1 音節ではなくて）単語の次末音節である、と見ることができる（1 音節語の場合は、長さの制限から第 1 音節が長くなるしかない）。

4 音節語になると、複合語アクセント規則が複雑に絡み合っ型が増え、単純に A~C に分類できなくなってしまうが、(23) を前提に主要な型を取り上げると、(24) のようになる。前部要素、後部要素の単独のアクセントも示す。

- (24) A: [kanI:]Kugi (金釘), [kanI:]Kuginu [kanI: (金, A), [Kugi: (釘, A)  
 [kana:]zIcI (金槌), [kana:]zIcInu [kanI: (金, A), [CI:]cI (槌, C)  
 B: namami[sju: (生味噌), namami[sju:]nu nama[: (生, B), misju[: (味噌, B)  
 jagizI[ru: (山羊汁), jagizI[ru:]nu ja:[gi (山羊, C), sIru[: (汁, B)  
 C: macIna:[ba (松茸), macIna:[ba]nu ma:[cI (松, C), na:[ba (茸, C)  
 misjuga:[mI (味噌甕), misjuga:[mI]nu misju[: (味噌, B), ka:[mI (甕, C)

服部の論の中心となっている C 群から見ていくと、単独形 ja:[gi (山羊), ma:[cI (松) の第 1 音節は、複合語の前部要素になると jagizI[ru: (山羊汁), macIna:[ba (松茸) と短母音で出ている。他に、ma:[sju (塩<真しお) に対する masju’a:[zI (塩味, 味は [’azI) もある。単独形が B 群の nama[: (生), misju[: (味噌) の第 2 音節も、複合語の前部要素では namami[sju: (生味噌), misjuga:[mI (味噌甕) と短くなる。他に、kumI[: (米) も kumICI[bu: (米粒, 粒は [CIbu:), duku[: (毒) も dukuna:[ba (毒茸) となる。前部後部とも長母音を含む \*ma:cIna:ba, \*nama:misju: などではない<sup>10)</sup>。

9) 他に、たとえば 2 音節名詞には [Ma:]cI (火) がある。重音節・軽音節・重音節の連続からなる 3 音節語には 5 つの型がある。これらの (23) に納まらない型も含めた全体像は上野 2016 を参照のこと。なお、その拙論の A 型, B 型, C 型, D 型等の共時的な型の名称と、本稿の A 群~C 群とは無関係なので注意。また、アクセントの対応資料は上野 2017a, b を参照。

10) ただし、ma:da[zI:]ru (烏賊墨汁), do:gu[ba:]ku (道具箱) では、複合名詞の次末音節のみならず、前部要素の ma:[da (烏賊墨), do:[gu (道具) も長母音を保っている ([haku: は A)。「道具」は借用語に違いないが、ma:[da と (24) の ma:[cI, ja:[gi の振る舞いの差が何に拠るかは未詳。「烏賊墨」は祖形で長母音 \*ma:da で、「松」等は元は短母音 \*macI であった可能性も考えなければ

一方、A 群の単語が前部要素に立つと第 2 音節の長母音を保持するのに対して、後部要素の [Kugi: (釘) や [CI:]cI (槌) は、[kanI:]Kugi (金釘), [kana:]zIcI (金槌) となって単独形の長母音が短くなる<sup>11)</sup>。A 群と B・C 群では一見振る舞いが異なるが、前部・後部がともに長母音で出ることはないという点で共通する。

すなわち、4 音節語においても 2・3 音節語と同じ原則で長母音の出現位置が決まり、複合語を含む単語全体において、A 群はその第 2 音節、B 群は語末音節、C 群は語次末音節が長母音で出るのである。5 音節語以上でも、[CIkja:]ra (力) と [CIkja:]rasIgiutu (力仕事, 仕事は [sIgiu:]tu); takara[: (宝) と takara[ba:]ku (宝箱); tI:[da (太陽) と tIdaga[na:]sI (その敬語), tama:[gu (卵) と tamagu[ja:]ki (卵焼き) などである (B は C に移行するようだ)。

これに従えば、琉球祖体系に長母音を立てる場合も、2 音節語の「語頭長音節」のように見える形が実は「語次末長音節」である可能性も視野に置きながらさらに検討が必要となる。長音節の位置がアクセント核に関与するとすれば、それが第 1 音節、第 2 音節 (… ) にあるか、語次末音節、語末音節 (… ) にあるかは、多音節語を含むアクセント体系全体に影響する問題だからである。

その一方で、浅間方言の長母音分布の様相は、本来の母音の長短の対立としては不自然で、むしろプロソディーと連動していることを伺わせる。これが琉球祖語に遡るのではなくて、何らかの条件で二次的に発生した可能性も排除せずに考え続ける必要がある。

### 3.4 服部仮説の第 2 根拠

服部 1959: 281 は、名瀬【今は奄美市】方言の対立例 (25) を第 2 の論拠として挙げる。

- (25) t'ɔ'ra, t'ɔ'raɱnu (俵) と t'ɔ'ra, t'ɔ'raɱnu (虎)  
 t'k'ɔ'ra, t'k'ɔ'raɱnu (河) と t'k'ɔ'ra, t'k'ɔ'raɱnu (倉, 鞍)

そして、「高起式の「俵」「河」の第 1 音節の短か母音 ɔ は京都方言などの awa に対応し、長母音から変化したものに違いない」とする。さらに、多くの方言において長母音で出る 1 音節名詞 +nu (が) も、t'haɱnu (葉, 齒), t'kiɱnu (毛, 木) と高起式であることも指摘した上で、次のように述べる。

- (26) 「これも、名瀬方言で母音が短くなったために、高起式アクセントとなったのであろう。更に詳しく言えば、LCVV[CV の第 1 モーラは LCV[CV の第 1 モーラよりやや強く且つ高く発音され勝ちであった (それは自然なリズム現象で、方々の方言で類似のアクセントが見られる) ためにこの、CVV が CV につづまったとき、高いモーラとなったのであろう。」

／ ならないが、「烏賊墨 (蛸墨も含みうる)」に関する手元のデータは少なく (別語の kuri を使う方言もある)、長母音であったという確たる証拠は得られていない。

11) ここに見るように、浅間方言では、単純語とそれを前部要素とする複合語との間に「高起 (A) / 低起 (B または C) の式保存」が成り立ち、A は A に、B と C は B または C になる (B → B, C → C ではない)。「水」などの若干の例外も含む具体例は、上野 2014 を参照。

### 3.5 第2根拠に関する私見

ここで注意すべきは、確かに長母音音節は高い短音節にはなったが、下げ核ができたのではないことである。関わっているのは核特徴ではなく、服部も「高起式」と書いてあるように「式特徴」の話である。恐らく、服部としては長母音の短縮により「高音調」が発生した例を示すことによって、核が発生し得ることへの傍証としたものなのであろう。

しかしながら、そもそも(26)の変化過程を経て高起式音調になったとする説には疑問がある。確かに、CVV[CVはCV[CVよりも第1モーラが高まる変化が起りやすいが、通常は、このあと、%CV]V[CV(%は半上昇)を経て、やがて[CV]VCVとなり「核」をもつ。すなわち、服部の \*to:[ra から出発するならば、その後の変化は

(27) \*to:[ra → \*%to:[ra → \*[to]•ra (•は半長) → [to]ra

となる方が自然であるのに、そうなっていない。(ちなみに、(27)の場合も、短縮前の段階で核は生じている。)

名瀬方言の場合、それよりはむしろ、出発点を変えて、

(28) \*ta[wara → \*tɔ:[ra → \*tɔ:[ra → \*tɔ•[ra → tɔ[ra

のような変化を遂げたと私は見る。\*ta[wara → \*tɔ:[raにおける語頭の高まりは、tɔ:の1音節内での急上昇を避けた変化で、長母音に変わると同時にこのような音調で実現したものと考える。そして、ここでも長母音段階で高い「式音調」となってから短縮したもので、その逆ではなく、かつ、そこに下降はなくて下げ核への変化は起こらなかったものとする。

以上の2つの根拠に対する批判の要点は、すでに上野 1996: 23-27, 35 に述べたところでもある(本稿で触れなかった点もそこには含まれている)。

### 3.6 琉球方言の古い音調型

上記2論拠に基づき、服部 1979b: 108 は「琉球語の過去の或る時期」における音調型として以下のものを考える。なぜか、「琉球祖語」の音調型という表現は見られない。あえてそこまでは踏み込まなかったのかもしれない。また、A群についても特に述べていない。

(29) 「【舟、甕】などC群の】諸単語は、琉球語の過去の或る時期において、低く始まる上昇的アクセントを有したので、第1音節の長母音が、与那嶺、亀津、名瀬、阿伝の諸方言で短母音化するときに、つづまって、そこにアクセントの山が生じたのであろう。」

(30) 「【雨、山】などB群の】諸単語の第2音節母音が、恩納、(久志、)与那嶺、浅間の諸方言で長いのも、古形を保存するもので、亀津方言でつづまって短母音化するときに、そこにアクセントの山が生じたものと考えられる。」

### 3.7 琉球方言の古い音調型に関する私見

まず、(29) C群の「低く始まる上昇的アクセント」は、「諸単語は」から「単語全体」の音調とも取れるが、おそらく「第1音節」の音調のつもりであろう。次の(31)の想定をして

いるものと解する。この変化は、現実には重音節の中では緩やかな上昇調の %CV[V-] であったとすれば、それが短縮すれば高くなるもので、ありえない仮説ではないであろう。

(31) \*CV[V]CV → [CV]CV

それに対して、(30) B 群は第 2 音節の母音が長いとはっきり書いてあり、(32) の変化を想定していることは疑いない。

(32) \*CVCV[V → CV[CV](nu)

しかし、これには問題がある。語頭音節の長母音と第 2 音節の長母音とを対等に扱い、(31) に合わせて \*CVCV[V → CV[CV と第 2 音節が高くなる場所までは認めたとしても、亀津方言は 'a[mI]nu (雨が) なのでその後には下降 (j) の生ずる理由が必要なのに、(32) の祖形からはそれが説明できないからである (上野 1996: 38)。そのためには、\*CVCV[V] のような祖形が必要となるであろう。そうすると、浅間方言は CVCV[V, CVCV[V]nu であるから、音調面では「古形を保存するもの」ではなく、\*CVCV[V](nu) の後で上昇・下降が遅れ、さらに下降は消えてしまったとしなければならなくなる。

現段階では、琉球祖語の B 群に、そしてさらには C 群にも具体的にどういふ (長母音の有無を含む) 祖形を考えるべきか、ここに明示できる成案はまだない。ただし、A 群には私は \*[○!○, \*[○○!△ (! は半下降) の下降式音調を設定しており、これは以前から変わっていない。首里方言の [ha]na, [hana]nu (鼻が) などはこれから容易に導き出すことができる<sup>12)</sup>。

また、そもそも琉球祖語が A/B/C の 3 つの型を持ち、三型アクセント体系をなしていたかという点から慎重に検討しなければならないと私は考えている。少なくともこの 3 つの類 (群) があったことは疑いないが、それ以外になかったという確認はできていない。私の調査では、多型アクセントの方言、三型に納まらない方言もいろいろ見つかっており、三型から出発するとなると、それらがどのようにしてより多くのアクセント対立を持つに至ったかの証明も必要になる。一部は音環境から説明できる部分もあるが (tonogenesis)、他は現段階では困難という見通しを持っている。

現在、琉球方言のアクセント研究は急速に進展しつつある。琉球方言アクセント史の全体像はそれらを踏まえて描き直されることになるだろう。

12) まだ活字にはしていないが、2015 年 10 月 4 日に神戸大学で開かれた日本音声学会シンポジウム「日本語の三型アクセント——原理と歴史——」において、コメンテーターの立場から南琉球三型アクセント (宮古島池間, 小浜島, 西表島, 波照間島, 多良間島) の ABC それぞれの祖形案を提示し、A には下降式音調を設定した。併せて述べるならば、浅間方言の A 群第 2 音節の長母音を下降式音調から導き出すことも可能だと考えている。半下降の後には、通常下降の後のような調音の弱まりもなく、長さも長めに実現するのが普通なので、それが長母音に発達しうると考えられるからである。もっとも、A 群は 3 音節語以上でも第 2 音節が長母音に変化したとするならば、頻用される 2 音節名詞のパターンが拡張したものと見なければならぬであろう。

#### 4. 日本祖語の音調型

##### 4.1 服部の想定する音調型

最後に、服部 1979b: 110-111 は日本祖語の音調型について、次のように述べる。長くなるが、必要なので引用する（下線と【】は引用者、圏点は原文）。

- (33) 「日本祖語の2音節名詞には、『類聚名義抄』の5類の区別に対応する5種のアクセントの区別があった、とせざるを得ないと思う。」
- (34) 「「第一類」と「第二類」は高く始まり、「第三類」「第四類」「第五類」は低く始まるアクセントであったであろう。」
- (35) 「【「舟」などの】単語の第1音節母音、さらに【「山」などの】単語の第2音節母音は長くかつ低く始まったので、そこに“アクセントの山”ができる可能性はどの方言でも持っていた。故に「甲種アクセント」の<sup>○</sup>四<sup>○</sup>周<sup>○</sup>の<sup>○</sup>方<sup>○</sup>々<sup>○</sup>の「乙種アクセント」の諸方言<sup>13)</sup>で、そういう変化が独立に起こったとしても不自然ではない（琉球諸方言の状態参照）。」
- (36) 「第一類」と「第二類」とは高く始まるという点が共通していたので、琉球諸方言、九州方言の一部、東北方言の一部、島根方言の一部などで、両者が合流したのであろう。そして、「第二類」【「音」など】の第2音節の母音は恐らく長くかつ低く始まったために、「乙種アクセント」（の一部）でここに“アクセントの山”ができたのではないか（こういう変化が起こり得ることについては、徳之島亀津方言の第三表の単語を比較<sup>14)</sup>。）」
- (37) 「畿内を中心とする「中央方言」は、母音の点では四周の方言に起こらなかった変化を起こしたけれども、アクセントの点では非常に保守的だったということになる。のみならず、日本祖語の長母音が短縮するとき、そこに「アクセントの山」（アクセント核）ができなかったわけだが、喜界島小野津、沖縄本島久志（首里）の方言など、そういう例は少なからず見出されるから、決して起こり得べからざる変化ではない。」

##### 4.2 日本祖語の音調型に関する私見

このうちの(35)は次の問題がある。

母音が「長くかつ低く始まった」とあって「長くかつ低かった」と書いていないのは「低く始まって上昇した」可能性を残しているのであろう。しかし、「低く始まった」だけではそもそも核は生じえず、少なくとも「低く始まって上昇した」と明示することが必要である。

13) なお、「甲種／乙種アクセント」は、服部がアクセントの比較研究の最初期の段階で使った用語で、その後は、概ね「京阪式／東京式アクセント」に取って代わられた。その「京阪式／東京式」も、内容が共時的・類型的基準と通時的・系譜的基準とが混在していて不適当だと考えて私は避け、別の用語を用いている。次節以降の「内輪式」、「中輪式」、「外輪式」はその例である（金田一春彦の「内輪東京式」などではないことに注意）。

14) この括弧内にある「第三表」について上野 1996: 38 注 16 後半で「第三表」は「第三類」に当たるゆえにその参照に疑問ありとしたが、今では、ありうる音変化の例としてあげただけで、類の対応関係は考慮に入れていないものと考えている。疑問は撤回する。

しかも、「舟、鍋」などの第2音節が高く始まった——その後の下降を排除せず——とすると、第1音節が低く始まって上昇しても、高くなったまま第2音節に続く以上、第1音節に下げ核/↓/が生まれる余地はない。

従って、(35)から四周諸方言で独立に下げ核が生じたと見るのは困難となる。

次に、(36)の第2類について述べる。

「下げ核」が生ずるためには、第2類の第2音節がただ「低く始まった」とするだけでなく、やはり「上昇して、かつ下降した」を加えなければならない。そうなると、\*[CV]CV[V]のような凹み型(二山型)を想定することになる。しかし、類型的に見て、凹み型の単一の存在はアクセント体系上稀で、第1類も\*[CV]CV[V= (=はそのまま平らに進む意)のごとき可能性が出てくる。

しかし、そもそも第2類が高く始まり、その第2音節が(長くて)低く始まったとしたら、第2音節ではなく、第1音節に下げ核が生ずる方がはるかに自然である。たとえ\*[CV]CV[V]であっても[CV]CVへの変化が一般的であり、\*[CV]CV[V] → CV[CV]は特異で、内輪式・中輪式で独立に生ずる可能性は少ないと言わざるを得ない。

最後に、(37)短縮で核ができなかった例に移る。

長母音の短縮で核が生じないことがあっても、確かに不思議でない。同じ条件下でも変化が起こったり起こらなかったりし、起こったとしてもその時代が異なるが故に方言差が生ずるのである。歴史の一回性という原理からして、理由付けは変化が起こった後の後追いにならざるをえず、それさえ困難な例もあることは事実である。

しかし、そうは言っても、たとえば、\*CVCV[V]の第2音節に核が生じなかったのは、(既述のように、他方言の有核型を派生させるためにはその後に下降がある必要があったと見るが、それは措いておくとしても)いち早くCVCVV[△(△は助詞)に変化して長母音が低平調になっていたため、という程度の理由付けは、やはり必要ではないかと考える。

#### 4.3 服部による金田一批判

服部 1979b: 106 は、金田一春彦 1975 [1960] の日本祖語アクセントに関する説も無理であるとして、次のように退ける。

- (38) 「十二世紀の院政時代のアクセントが祖形で、それから【土佐方言式アクセントとなったのちに、さらに、アクセント核が一モーラずつ後へずれて】東京式の【中部地方、関東地方の(大部分)などに広く分布する】アクセントができたというのだが、同じ変化が【近畿式アクセントに距てられて互いに遠く離れている】奈良県南部の十津川にも、中国地方にも、四国の西南部にも別々に起こった、と言わなければならないわけで、それだけでも無理だと感ぜられるが、九州、琉球の諸方言をも考慮に入れると一そう無理なことが明らかとなる。」(圏点もこの【】も、その中の表記も原文のまま)

#### 4.4 服部・金田一両説に関する私見

金田一説は、特に琉球方言については成り立たないことは明らかである。また、その本土方言の代案は上野 1988, 2006 に既述ゆえ、ここでは略す。

しかし、本土方言に関する限り、内輪式、中輪式、外輪式からそれより多くの対立を有する中央式を導き出すことができない以上、どういふ仮説を取るにせよ、「四周において独立に同

じような変化を遂げた」とする以外に道はない。

今、二者択一として、どちらがより独立に生じやすいかと問うた場合、長母音短縮説よりも金田一の滝後退説（の修正版）の方が、現実の世代別変化として類例が観察されている<sup>15)</sup>だけに優勢であると私は判断する。服部説は、可能な選択肢を増やしたものの、とりわけ本土方言に関して詰めるべき課題を多く残しているとする（上野 1996: 39-40）。

## 5. まとめ

母音の短縮で核が生じたとする服部の主張とは異なり、アイヌ語では昇り核、琉球方言の場合は下げ核が長母音の段階で生じ、その後で母音の短縮が起こったと考えられる。

核や式音調が長母音から発生することは可能であるが、その条件はさらに精密化すべきである。

アイヌ語祖体系には、服部とは一部違う仮説が可能である。

日本語祖語における長母音については、さらに検討が必要である。

### 参考文献（著書に再録の雑誌論文の引用等は著書に拠る）

- 服部四郎 1959 「奄美群島の諸方言について——沖縄・先島諸方言との比較——」『人類科学』XI: 77-99. 服部 1959 『日本語の系統』, 岩波書店 275-294. 【同書 p. 408 に「昭和 33 年 5 月稿『人類科学』IX」とあるが、実際の刊行は「昭和 34 (1959) 年 4 月『人類科学』XI」。同誌は 9, 10, 11 号が連続で奄美調査報告となっており、原稿提出後に予定掲載順が変更になったのか、IX が XI の誤植かは不明であるが、服部 1979a: 106 にも「IX」とあるところから、誤記が引き継がれている可能性が高い。同岩波文庫版、第 1 刷 1999: 427 でもそのままとなっている。なお、地名の「与名間」は文庫版では修正されている。】
- 服部四郎・知里真志保 1960 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 31-66.
- 服部四郎 1961 「アクセント素・音節構造・喉音素」『音声の研究』9: 1-21.
- 服部四郎編 1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 服部四郎 1967 「アイヌ語の音韻構造とアクセント——アイヌ祖語再建の一試み——」『音声の研究』13: 207-223.
- 服部四郎 1973 「アクセント素とは何か？そしてその弁別の特徴とは？——日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって、“調素”の単なる連続にあらず——」『言語の科学』4: 1-61.
- 服部四郎 1976 「はしがき——アイヌ語におけるカラフト方言の位置とその最後の話し手藤山ハルさん——」村崎恭子『カラフトアイヌ語』, i-xv, 国書刊行会.
- 服部四郎 1979a 「日本祖語について」21『月刊言語』11月号: 97-107.
- 服部四郎 1979b 「日本祖語について」22『月刊言語』12月号: 100-114.
- 板橋義三 2001 「樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントとの史的関係 (1)——両アイヌ方言の音韻における史的関係の解明に向けての研究序説——」『言語文化論究』(九州大学大学院言語文化研究院紀要) 14: 87-103.

15) 世代別変化が持つ意義は大きい。もとより、標準語化に代表される外的な変化ではなく、内的に起こったものをさすが、これが現実を観察された変化であって、研究者が頭の中で想定した変化ではないからである。2.6 節などで取り上げた上昇・下降の音調移動の方向についても同様である。右方向か左方向かで諸説があるが、私の見るところでは、ほとんどが比較研究による推定解釈であるために、見解の相違というレベルに留まりがちである（朝鮮語の例もその一つ）。日本語の場合は、世代別変化の報告がいくつかあり、複数の型の上に組織的に起こっている変化はいずれも右方向で、その逆の変化は、分節音が「弱」という限られた環境において部分的に、しかも既存の型との合流という場合に限られている（Uwano 2012: 1432-1435）。なお言語（の構造）による移動方向の差がないのか、他言語からの音調の世代別変化報告が欲しいところである。

- 金田一春彦 1975 [1960] 「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7: 59-80,  
金田一春彦『日本の方言——アクセントの変遷とその実相——』, 129-159, 教育出版株式会社.
- 村崎恭子 1979 『カラフトアイヌ語——文法篇——』, 国書刊行会.
- 田村すず子 1988 「アイヌ語」『言語学大辞典』第1巻, 6-94, 三省堂.
- 上野善道 1977 「日本語のアクセント」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語5 音韻』, 282-321, 岩波書店.
- 上野善道 1986 「青森市方言の動詞のアクセント」『日本海文化』13: 1-49.
- 上野善道 1988 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道 1989 「日本語のアクセント」杉藤美代子編『日本語の音声・音韻(上)』講座日本語と日本語教育2, 178-205, 明治書院.
- 上野善道 1992 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-13.
- 上野善道 1996 「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15: 3-68.
- 上野善道 2006 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 上野善道 2014 「徳之島浅間方言のアクセント資料(1)」『国立国語研究所論集』8: 141-175.
- 上野善道 2016 「徳之島浅間方言の名詞アクセント体系」田窪行則・ジョン・ホットマン・平子達也編『琉球諸語と古代日本語——日琉祖語の再建に向けて——』, 209-234, くろしお出版.
- 上野善道 2017a 「徳之島浅間方言のアクセント資料(3)」『国立国語研究所論集』12: 139-161.
- 上野善道 2017b 「徳之島浅間方言のアクセント資料(4)」『国立国語研究所論集』13: 209-242.
- Uwano, Zendo. 2012. "Three types of accent kernels in Japanese," *Lingua* 122: 1415-1440.
- Vovin, Alexander. 1993. *A Reconstruction of Proto-Ainu*. E. J. Brill, Leiden.

原稿受理日—2017年2月26日